金大医保紀要 Vol. 24 No. 2
141～150　2000

子育て支援セミナー受講前後における母親と保育士の子どもに対する意識の変化

木村留美子　津田　朗子　五十嵐透子
河田　史宝　関　秀俊

要　旨

子育て支援セミナーに参加した母親と保育士を対象に，セミナーの効果と今後に求められる子育て支援の在り方を検討した。

1，子どものイメージについて，セミナー受講前の母親の印象は，好き嫌いといった情動により有意差のみられた８項目に対して肯定的あるいは否定的な側面を示していた。しかし，受講後は母親の情動に相違はあっても有意差のみられた11項目は全て肯定的に捉えられていた。保育士の場合には，セミナー受講前後で情動による子どもの見方に相違はなかった。

2，子ども観に関しては，セミナー受講後に子どもが苦手，または好きでも嫌いでもないと答えた母親と保育士の方が，子どもの自立，子育てに対する大人の姿勢やあるべき姿をより深刻に受け止めていた。

3，子育てについては，母親も保育士も子育ては女性の仕事であるとの項目に対して「どちらかと言えばそう思う」と答えていた。また，子育てのために自分の生き方や生活時間を変えることには「あまりそう思わない」と答えており，現代の親は子育てに対して多少距離を置いて捉えていることが示された。

4，子育てに対する母親の意識の変化からは，セミナー受講後に子どもが示す行動の意味の理解が深まり子育てが楽になりゆとりが持てるようになったと答えていた。

以上のことから，子育て支援セミナーは有効であり，今後も継続する必要があると判断された。

KEY WORDS

Parenting Workshop, Mothers, Nursery School Teachers

はじめに

戦後，我が国の経済発展は農村の過疎化と都市部の過密化をもたらし家庭のあり方にも大きく変化を及ぼした。このことにより，家族の形態は単純化し，老人を知らない，子どもを知らない若者が増加した。第二次ベビーブームに生まれた子どもたちはこのような環境で育ち，現在子育ての時期にかかっている。現代という時代は，価値観が多様化する一方で排他的な考え方も強いという不可解な社会現象を示している。このような中にあって，家族の形態は多くが核家族であり，子育ての支えは個性を無視した育児書とかつて自らが経験してきた親子関係だけである。そのため，現代の母親達は子育てに対して自信を抱けないでいる[1・2]。このような状況を鑑み，近年子育てを支援するネットワーク作りや活動が盛んに行われている[3]。石川県金沢市でも６ヶ所の私立保育園が豊かな子育てを支援するために子育て支援センターを開設している。

そこで，本研究は金沢市の子育て支援センターが主催する子育て支援セミナーを担当し，その効果と今後に求められる子育て支援の在り方について検討したので報告する。

対象および方法

1，子育て支援セミナー

表１に子育て支援セミナーの内容を表した。子育

金沢大学医学部保健学科

表1　子育て支援セミナーの内容

	開催月	内	容
1回目	10月	子どもの発達と アタッチメントについて	質疑応答 子育てに関する全体討論 母子のタッチングタイム
2回目	11月	子どものしつけ 叱り方、誉め方	質疑応答 子育てに関する全体討論 母子のタッチングタイム
3回目	12月	離乳食 食生活習慣病 予防接種 発達の節目	質疑応答 子育てに関する全体討論 母子のタッチングタイム

時間は各1回3時間30分

て支援セミナーは公的機関から支援を受け，石川県金沢市の6ヶ所の私立保育園において運営されている子育て支援センターの主催による母親と保育士のための勉強会である。1回のセミナー時間は3時間30分で，母親が安心して受講出来るように毎回託児施設を開設した。

2，対象

対象は，0歳から3歳までの子育てに悩みを持ちながら家庭保育をし，子育て支援センターに週1回来所している母親とそれを担当している保育士であった。

3，調査時期と調査項目

調査は了解を得た後，セミナー受講前の10月と受講後の12月に行った。セミナー参加者の子どもに対する意識の変化については調査表を用いた。また，母親の子育てに対する意識の変化はセミナー終了約1ヶ月後に自由記載により確認した。子どものイメージについての調査項目は，Osgood ら[4]が考案した Semantic Differential Method（SD 法）[5]を井上ら[6]が心理学や教育学の分野で用いているパーソナリティに関する形容詞対について，項目の妥当性の検討を行い子ども観の測定に有効であるとした項目のうち43項目を選択し，表2に示した。項目には「とても」「かなり」「やや」「どちらともいえない」の4段階の評定尺度を設け，「どちらともいえない」を中心に1～7点とした。したがって，得点が高いほど左側の形容詞に近く，得点が低いほど右側の形容詞のイメージが強調される。また，研究者が独自に考案した参加者の背景と子ども観に関する項目も設けた。子ども観は表3に示し，「非常にそう思う」を5点，「そう思う」を4点，「ややそう思う」を3点，「あまりそう思わない」を2点，「全くそう思わない」を1点とし，得点化できるようにした。

有意差の検定は割合比較ではχ^2検定を行い，平均得点の比較には一元配置分散分析を行った。

結　果

1，対象者の背景

表4に対象者の背景を表した。対象は初回セミナー受講時には母親34名，保育士14名であった。しかし，本研究では3回のセミナー全てに出席した者を対象としたため分析の対象となったのは，母親15名（平均年齢31.1歳），保育士12名（平均年齢38.5歳）であった。子育て支援センターは，いずれの保育園でも経験のある保育士や主任保育士が担当しているため，平均年齢は39歳と高くなっていた。子どもとの接触の有無については，結婚前までに母親が何らかの形で子どもと接触する機会が有ったかどうかを尋ねたものであるが，表に示すように体験の有る者が12名（80%），経験の無い者が3名（20%）であった。したがって，20%の母親は我が子が生まれて初めて子どもとの接触を持ったことになる。母親自身の子どもの数については，1人が10名（66.7%），2人以上が5名（33.3%）で，子ども1人の者が多かった。

表2　子どものイメージの形容詞対の質問紙

	とても	かなり	やや	どちらでもない	やや	かなり	とても	
(1) 明るい								暗い
(2) やわらかい								かたい
(3) 暖かい								冷たい
(4) 積極的な								消極的な
(5) 強い								弱い
(6) 静かな								うるさい
(7) 陽気な								陰気な
(8) 活発な								不活発な
(9) 好きな								嫌いな
(10) 良い								悪い
(11) 親切な								不親切な
(12) 鋭い								鈍い
(13) 気持ちの良い								気持ちの悪い
(14) 頼もしい								頼りない
(15) たくましい								弱々しい
(16) 真面目な								不真面目な
(17) 愉快な								不愉快な
(18) 安定した								不安定な
(19) おしゃべりな								無口な
(20) きちんとした								だらしのない
(21) 素直な								強情な
(22) 責任感のある								無責任な
(23) 落ち着いた								落ち着きのない
(24) 理性的な								感情的な
(25) 意欲的な								無気力な
(26) 可愛いらしい								憎らしい
(27) のんびりした								こせこせした
(28) 勇敢な								臆病な
(29) 優しい								厳しい
(30) 丸い								四角い
(31) 強気な								弱気な
(32) 思いやりのある								わがままな
(33) 清潔な								不潔な
(34) 元気な								疲れた
(35) 幸福な								不幸な
(36) 敏感な								鈍感な
(37) 激しい								おだやかな
(38) 楽しい								苦しい
(39) すばやい								のろい
(40) はっきりした								ぼんやりした
(41) まとまった								バラバラな
(42) 優れている								劣っている
(43) 生き生きした								生気のない

表3　子ども観についての項目

1．子どもは環境からの影響を受けやすいと思う。	1	2	3	4	5
2．子どもは良くも悪くも可能性を秘めていると思う。	1	2	3	4	5
3．子どもは自らの力で自立することができると思う。	1	2	3	4	5
4．子どもに関する責任は親より社会や学校にあると思う。	1	2	3	4	5
5．子育ては女性の仕事だと思う。	1	2	3	4	5
6．子育てのために自分の生き方や生活時間を変える必要はない。	1	2	3	4	5

1:全くそう思わない，　2:あまりそう思わない，　3:やや思う，　4:そう思う，　5:非常にそう思う

2，子どものイメージと情動

表5は「子ども」と聞かれて何歳位の子どもの年齢をイメージするか，セミナーの受講前後で尋ねたものである。セミナー受講後の母親（6.1±6.0歳）と保育士（3.9±3.2）の間に有意差がみられ，母親の方がセミナー受講後に子どもの年齢を幅広く捉えていた（$P<0.05$）。しかし，いずれにしても子どもの年齢は概ね小学校低学年までを想定しており，これに基づいて母親も保育士も子どものイメージ調査へ回答したものと判断できる。

表6は子どもに対する「好き，嫌い，苦手，好きでも嫌いでもない」といった情動をセミナー受講前後で調べたものである。有意差はみられていないが，セミナー受講後には子どもが苦手な者が4名から1名に減少し，好きと答えた者が16名から20名に増加した。子どもが苦手と答えた者は全て母親であった。

表7は，セミナー受講前後における母親の情動の変化から子どものイメージを一元配置分散分析によ

表4　対象者の背景

	人数	年齢
母親	15名	31.1±3.2歳
保育士	12名	38.5±4.4歳
母親が結婚前までに子どもと接触した体験の有無		
有	12名(80.0%)	
無	3名(20.0%)	
母親自身の子どもの数		
1人	10名(66.7%)	
2人以上	5名(33.3%)	

表5　“子ども”と聞いて何歳くらいをイメージするか（歳）

			イメージする子どもの年齢
セミナー受講前	母親	(15名)	5.4±4.3
	保育士	(12名)	5.8±3.4
セミナー受講後	母親	(15名)	6.1±6.3]*
	保育士	(12名)	3.9±3.2]*

*：p<0.05

り比較したものである。受講前は43項目のうち8項目に，受講後は11項目に有意差がみられ，“やわらかい”，“好きな”，“良い”の3項目は受講前後に共通してみられた項目であった。受講前の8項目では，“やわらかい”（P<0.01）と“好きな”（P<0.001）は子どもを好きな者が「とてもそう思う」，苦手または好きでも嫌いでもない者は「ややそう思う」と答えていた。“良い”（P<0.01）と“優しい”（P<0.05）は子どもを好きな者が「かなりそう思う」，苦手または好きでも嫌いでもない者は「ややそう思う」から「どちらでもない」と答えていた。“頼もしい”，“のんびりした”，“思いやりの有る”は子どもを好きな者が「ややそう思う」（P<0.05），苦手または好きでも嫌いでもない者は「どちらでもない」あるいは逆のマイナスイメージを抱いていた。しかし，“激しい”の項目は子どもが苦手または好きでも嫌いでもない者が「ややそう思う」と答え，好きな者は逆のマイナスイメージを抱いていた（P<0.05）。このように，受講前は母親の情動により子どもに対するイメージは肯定的あるいは否定的な側面を示した。受講後の11項目では，“やわらかい”（P<0.01），“好きな”（P<0.05），“良い”（P<0.001），“明るい”（P<0.01），“暖かい”（P<0.05），“可愛い”（P<0.05），“愉快な”（P<0.05），“楽しい”（P<0.05），“生き生きした”（P<0.05）は子どもを好きな者が「とてもそう思う」，苦手または好きでも嫌いでもない者は「ややそう思う」と答えていた。“気持ちの良い”と“陽気な”は子どもを好きな者が「かなりそう思う」，苦手または好きでも嫌いでもない者は「ややそう思う」と答えていた（P<0.05）。このように，情動に相違はあっても母親はセミナー受講後に有意差のみられた11項目を全て肯定的に捉えていた。

表8は，セミナー受講前後における保育士の情動の変化から子どものイメージを一元配置分散分析により比較したものである。受講前は43項目のうち4項目に，受講後は1項目に有意差がみられた。受講

表6　セミナー受講前後における子どもへの情動の変化

	セミナー受講前	セミナー受講後
子どもが		
好き	16名(59.3%) （母親 8名、保育士8名）	20名(74.1%) （母親11名、保育士9名）
苦手	4名(15.8%) （母親 4名、保育士 0名）	1名(3.7%) （母親 1名、保育士 0名）
好きでも嫌いでもない	7名(25.9%) （母親 3名、保育士 4名）	6名(22.2%) （母親 3名、保育士 3名）

表7　母親のセミナー受講前後における情動の変化からみた子どものイメージ

セミナー受講前					セミナー受講後				
尺　度		人数	平均得点±SD		尺　度		人数	平均得点±SD	
やわらかい	a	8	6.63±0.70	**	やわらかい	a	11	6.73±0.45	**
	b	7	4.71±1.28			b	4	5.25±1.09	
好きな	a	8	6.63±0.48	***	好きな	a	11	6.64±0.64	*
	b	7	4.71±1.03			b	4	5.25±1.48	
良い	a	8	6.38±0.99	**	良い	a	11	6.73±0.45	***
	b	7	4.29±1.28			b	4	4.25±1.48	
優しい	a	8	6.13±1.05	*	明るい	a	11	6.55±0.66	**
	b	7	4.71±0.70			b	4	5.25±0.43	
頼もしい	a	8	5.00±1.32	*	暖かい	a	11	6.64±0.64	*
	b	7	3.14±0.99			b	4	5.25±1.09	
のんびりした	a	8	5.25±1.20	*	可愛い	a	11	6.91±0.29	*
	b	7	3.86±0.83			b	4	6.29±0.83	
思いやりのある	a	8	4.63±1.41	*	愉快な	a	11	6.55±0.66	*
	b	7	3.00±1.07			b	4	5.25±1.78	
激しい	a	8	3.88±0.93	*	楽しい	a	11	6.73±0.45	*
	b	7	5.43±1.05			b	4	5.75±1.09	
					生き生きした	a	11	6.82±0.39	*
						b	4	6.00±0.71	
					気持ちの良い	a	11	6.27±0.86	*
						b	4	5.00±1.23	
					陽気な	a	11	6.18±0.83	*
						b	4	5.00±1.71	

a：子どもが好きと答えた者　b：子どもが苦手，または好きでも嫌いでもないと答えた者

*：$p<0.05$　**：$p<0.01$　***$p<0.001$

表8　保育士のセミナー受講前後における情動の変化からみた子どものイメージ

セミナー受講前					セミナー受講後				
尺　度	人数		平均得点±SD		尺　度	人数		平均得点±SD	
好きな	a	8	6.38±0.69	**	丸い	a	9	5.89±0.31	***
	b	4	5.00±0.71			b	3	4.33±0.47	
素直な	a	8	6.50±0.50	*					
	b	4	5.00±1.20						
清潔な	a	8	4.75±0.66	**					
	b	4	3.50±0.50						
のんびりした	a	8	4.13±1.12	*					
	b	4	5.50±1.12						

a：子どもが好きと答えた者　b：子どもが好きでも嫌いでもないと答えた者

*：p<0.05　**：p<0.01　***p：<0.001

前の4項目は，“好きな”が子どもを好きな者が「かなりそう思う」，好きでも嫌いでもない者は「ややそう思う」と答え（P<0.01），“素直な”が子どもを好きな者が「非常にそう思う」，好きでも嫌いでもない者は「ややそう思う」と答えていた（P<0.05）。“清潔な”が子どもを好きな者が「ややそう思う」，好きでも嫌いでもない者は「どちらでもない」と答えていた（P<0.01）。“のんびりした”は子どもを好きでも嫌いでもないと答えた者に得点が高く「かなりそう思う」，好きな者は「どちらでもない」と答えていた（P<0.05）。受講後は，“丸い”の1項目に有意差がみられ，子どもを好きな者が「かなりそう思う」，好きでも嫌いでもない者は「どちらでもない」と答えていた（P<0.001）。このように，保育士の場合には受講前後で情動により子どもの見方は大きく異なっていなかった。

3，子ども観や子育てに対する意識の変化

表9は，セミナー受講前後における母親と保育士の情動の変化から子ども観を一元配置分散分析により比較したものである。母親の子ども観はセミナー受講前に6項目のうち1項目に有意差がみられ，“子どもは環境からの影響を受けやすい”の項目が子どもを苦手または好きでも嫌いでもないと答えた者に得点が高くなっていた（P<0.05）。受講後はいずれの項目にも情動による有意差はみられなかった。また，全体の得点をセミナー受講前後で比較したところ，“子どもは自らの力で自立することができる”の1項目に有意差がみられ，セミナー受講後の母親の得点が低くなっていた（P<0.05）。平均得点では有意差はみられていないが，セミナー受講後における母親の情動から子ども観に対する回答の内容をみると，“子どもは環境からの影響を受けやすい”と“子どもは良くも悪くも可能性を秘めている”の項目は，情動に関係無く両者とも「非常にそう思う」と答えていた。“子どもは自らの力で自立することができる”と“子育ては女性の仕事”の項目は子どもを好きな者が「あまりそう思わない」，苦手または好きでも嫌いでもない者は「ややそう思う」と答えていた。“子どもに関する責任は親より学校や社会にある”の項目は情動に関係無く両者とも「全くそうは思わない」と答えていた。“子育てのために自分の生き方や生活時間を変える必要は無い”の項目は子どもを好きな者が「あまりそう思わない」，苦手または好きでも嫌いでもない者は「ややそう思う」と答えていた。したがって，項目に対する回答の内容が情動により異なる3つの項目は，いずれも子どもが苦手または好きでも嫌いでもない者の方がその状況を肯定的に受け止めていた。

保育士の子ども観はセミナー受講前では情動による有意差はみられなかった。受講後は“子育ては女性の仕事”の1項目に有意差がみられ，子どもが好きでも嫌いでもない者の得点が高くなっていた（P<0.05）。受講後における保育士の情動から項目への回答の内容をみると，“子どもは環境からの影響を

表９　母親と保育士のセミナー受講前後における情動の変化からみた子ども観の比較

	セミナー受講前			セミナー受講後			前後差
母親の子ども観		人数			人数		
１．子どもは環境からの影響を受けやすい	a	8	4.25±0.83	a	11	4.73±0.62	
	b	7	5.00±0.25	b	4	5.00±0.30	*
	全体	15	4.60±0.71	全体	15	4.80±0.54	
２．子どもは良くも悪くも可能性を秘めている	a	8	4.75±0.43	a	11	4.82±0.39	
	b	7	4.86±0.35	b	4	5.00±0.30	
	全体	15	4.80±0.40	全体	15	4.87±0.34	
３．子どもは自らの力で自立することができる	a	8	3.25±0.97	a	11	2.36±1.22	
	b	7	3.71±0.70	b	4	2.75±0.43	
	全体	15	3.47±0.88	全体	15	2.47±1.09	*
４．子どもに関する責任は親より社会や学校にある	a	8	1.50±0.50	a	11	1.46±0.49	
	b	7	1.57±0.50	b	4	1.25±0.43	
	全体	15	1.53±0.50	全体	15	1.40±0.49	
５．子育ては女性の仕事だ	a	8	2.25±0.97	a	11	2.36±1.15	
	b	7	2.57±0.49	b	4	2.75±0.83	
	全体	15	2.40±0.80	全体	15	2.47±1.09	
６．子育てのために自分の生き方や生活時間を変える必要はない	a	8	2.13±1.16	a	11	1.91±0.67	
	b	7	2.00±0.54	b	4	2.75±1.30	
	全体	15	2.07±0.93	全体	15	2.13±0.96	
保育士の子ども観							
１．子どもは環境からの影響を受けやすい	a	8	4.25±0.97	a	9	4.58±0.42	
	b	4	4.75±0.43	b	3	4.88±0.47	
	全体	12	4.42±0.86	全体	12	4.87±0.47	
２．子どもは良くも悪くも可能性を秘めている	a	8	5.00±0.30	a	9	4.78±0.42	
	b	4	4.75±0.43	b	3	4.67±0.47	
	全体	12	4.92±0.28	全体	12	4.75±0.43	
３．子どもは自らの力で自立することができる	a	8	2.88±0.60	a	9	2.44±0.96	
	b	4	3.50±1.12	b	3	3.33±0.94	
	全体	12	3.08±0.86	全体	12	2.67±1.03	
４．子どもに関する責任は親より社会や学校にある	a	8	1.50±0.50	a	9	1.56±0.69	
	b	4	1.75±0.43	b	3	2.00±0.15	
	全体	12	1.58±0.49	全体	12	1.67±0.62	
５．子育ては女性の仕事だ	a	8	2.63±1.11	a	9	2.33±0.47	
	b	4	2.75±0.83	b	3	3.33±0.47	*
	全体	12	2.67±1.03	全体	12	2.58±0.64	
６．子育てのために自分の生き方や生活時間を変える必要はない	a	8	1.63±0.70	a	9	2.33±0.67	
	b	4	2.25±0.43	b	3	2.00±0.15	
	全体	12	1.83±0.69	全体	12	2.25±0.60	

a：子どもが好きと答えた者　b：子どもが苦手または好きでも嫌いでもないと答えた者
母親（受講前15名、受講後15名）　保育士（受講前12名、受講後12名）
*：$p<0.05$

受けやすい”と“子どもは良くも悪くも可能性を秘めている”の項目は情動に関係なく両者とも「非常にそう思う」と答えていた。“子どもは自らの力で自立することができる”の項目は子どもが好きな者は「あまりそう思わない」，好きでも嫌いでもない者は「ややそう思う」と答えていた。“子どもに関する責任は親よりも社会や学校にある”と“子育てのために自分の生き方や生活時間を変える必要は無い”の項目は情動に関係なく両者とも「あまりそ思わない」と答えていた。したがって，保育士の合も回答の内容が情動により異なる２つの項目は，子どもを好きでも嫌いでもないと答えた者の方が の状況を肯定的に受け止めていた。

表10はセミナー終了約１ヶ月後に母親の子育て 対する意識の変化を自由記述により尋ねたものでる。「子どもを感情的に叱る前に一呼吸置けるよ

表10　セミナー受講後の母親の気持ちの変化

回答内容	人数
子どもを怒る前に「なぜ」と問いかけたり、一呼吸置いて考えることができるようになった。	7
子育てが楽になった(自分の気持ちの持ち方ひとつでこんなにも明るく変わるものかと驚いた)。	6
子どもの発達がわかり、子育てに対してより積極的により楽しいという気持ちが強くなった。	4
今までは育児書と向き合い子どもと向き合っていなかったが、セミナー後は育児書にはない子どもへの対応を知り、気持ちにゆとりを持って子どもと向き合うことが出来るようになった。	4
育児書を読んで落ち込むより、周りの人ともっと積極的に子育てについて話し合っていこうと思うようになった。	4
子どもの発達がわかり、特徴を良いほうに考えられるようになった。	3
子どもへのいとおしさが増し、もっと子どもに向き合って接してあげたいと思うようになった。	3
感情(自分のストレスを子どもにぶつけていた)で怒ることが少なくなり肩の荷がふっと軽くなった。	2
子育てについて夫と積極的に話をするようになった。	2
暗い気持ちで育児を行っていたが、終了後はのびのびゆったりとした気持ちを持てるようになった。	2
初めての子育てに不安だったが落ち着いたような気がする。	2
子育てをとおして自分も一緒に成長していると思うようになった。	2
育児のやり方はひとつではなく、大人の価値観でなく子どもの個性に合わせて接していこうと思うようになった。	2
子どもはみんなで育てるものだと思うようになった。	1
自分の持っている善悪の尺度が本当に正しいのかどうか確認できた。	1
食事中の子どもとの会話を楽しむようになった。	1
人とのつながり(特に母子関係)には、お互いを思いやることがなによりも大切だと思うようになった。	1
子育ての悩みがあっても話し合ったり相談できることで心強い気持ちになった。	1
母親になれたことをあらためて喜びに感じた。	1

(複数回答)

になった」,「子育てが楽になった」,「子どもの発達がわかり子育てが楽しくなった」,「子どもと向き合うことが出来るようになった」,「周囲の人ともっと積極的に子育てについて話し合ってみようと思うようになった」などの意見が書かれていた。

考　察

セミナー受講前後で子どもや子育てに対する意識の変化は母親の方に様々な形で確認された。セミナー受講前に子どもに対する苦手意識を抱いていた母親は受講後に減少していた。母親が子どもに対して好感を持てない，あるいは苦手意識が強い要因には子どもとの接触体験の有無からもわかるように，母親になる以前に子どもと接したことがないことや（表4），子どもに対する知識がないまま母親になってしまったこと，周囲からの支援が得られていないことなどがその理由と考えられる。このような母親は子どもが示す行動の意味を理解できない場合が多く，今回の調査のように子どもに好感を抱けない親は近年増加している[7]。このことの最大の理由は周囲からのサポートの欠落による育児不安が考えられる。1980年に発表された「大阪レポート」[8]によれば，母親に育児不安をもたらす５つの要因の１つに，母親が子どもの欲求をわからないことが挙げられている。そこで，今回のセミナーでは，子どもが発達を遂げていく過程で示す「現象の意味」の理解に多くの時間を割いた。その結果，セミナー受講前は子どもの行動を理解できずに子どもは扱いにくいものという思いから子どもに対して苦手意識を持ち，好感を持てない者が多くいたが，セミナー受講後は子どもの発達の筋道を学習し，子どもが示すサインを理解できるようになり，母親の子どもに対する認識が変化し，子どもに対する情動の変化が生じたものと思われる。これについてはセミナー受講１ヶ月後の母親の自由記述からも明白である（表10)。さらに，このような変化は子どものイメージにおいてもみら

れた。母親が子どもに対して抱いていたイメージは，セミナー受講前には情動の影響を強く受け，これにより子どものイメージは肯定的にも，また否定的にも捉えられていた。しかし，セミナー受講後は情動の違いはあっても，このことが子どものイメージを否定的に捉えることはなく，子どものあるがままの姿を受け止めるような姿勢へと変化していた。一方，保育士の場合は，ベテランの保育士が担当していたためかセミナー受講前後で情動による大きな変化はみられず，保育の専門家として子どもの見方が情動により左右されてはいないことが示唆された。このように子どもをあるがままに受け止めようとする姿勢は，子どもの特性や発達の筋道を理解することで可能となり，ひいては子どもの発達保障へと発展する重要なことと考える。また，セミナー受講後の子ども観からは，子どもが苦手または子どもが好きでも嫌いでもないと答えた母親や保育士の方が子どもの自立や子育てに対する大人の姿勢をより深刻に捉え，大人として対処すべき規範によって強く拘束されている一面が明らかとなった。また，母親も保育士も“子育ては女性の仕事である”に対して「どちらかといえばややそう思う」と答え，“子育てのために自分の生き方や生活時間を変える”ことに対しては「あまりそう思わない」と答えており，これらのことは現代の親が子育てに対して多少距離を置いて捉えていることを示すものといえる。さらに，母親が育児期間中に家に居るといらいらしたり，世の中から置いていかれそうになる等の不安感を強く感じる[10]ことと重ね合せると，生きがいや能力は子育てとは別のところにあるという考え方が現代人に多くなっていることを示していると考える。つまり，現代の親たちは子育てを子どもと共に自らも育ち会う機会，あるいは自己実現へ向かう一過程としての受け止めをしていないところにも現代の子育てを難しくしている原因の１つがあると考える。

今回のセミナーは，１人で家庭保育をしている母親にとって，子どもの特徴や発達の現象が示す子どもの行動の意味等を学習する機会となり，母親の子育てに対する深刻な育児不安を軽減させることができたものと思われる。現代のように閉鎖的な社会は，母親の育児不安をより増強させる。特に夫の育児に対する理解が不足している場合には，母親の孤立感は一層増すことになる。今後，今回行ったような子どもの特性理解や子育て相談等を行うことで孤立した母親を支援し，夫の育児参加への導入を促す等社会的支援の果たす役割はますます重要であると考える。

ま と め

子育て支援セミナーは，子どもに対する知識や発達に左右されながら子どもが示す現象を理解することで，子ども本来の姿を自然に受け止めることができるようになり，家庭で保育している母親に子育てをする際の心のゆとりをもたらす上で重要であった。

本研究は，セミナーに参加した母親と保育士を対象に行ったが，保育士は日々の保育活動を通して「子どもとは」といった意識を常に持っている。しかし，子どもは日々成長・発達を遂げておりさまざまな変化を示す。そのため，その時々で母親の心は揺れ動き，新たな不安を生み出すことが考えられる。本結果からも明らかなように，母親の子どもに対する思いはその時の情動によって大きく左右される。したがって，今回のセミナーで学習した子どもに対する理解が，どれほど確かなものとして深く母親の心や認識に変化をもたらしたかは不明である。子どもの問題が噴出している昨今，孤立している母親に対する社会的支援は重要であり，継続の必要性を痛感する。

文　献

1，佐々木雅美：精神科医の見る子育て不安，現代のエスプリ，342：28－32，1996.

2，芹沢茂登子：電話相談からみた子育ての悩みと不安，現代のエスプリ，342：38－45，1996.

3，山本真実：三鷹市における乳幼児の子育て支援ネットワークの資源，発達，84(21)：２－21，2000

4，Osgood, C, E, et al.：The Measurement of Meaning. University Of Illinois's Press. Arbama, IL 1957.

5，岩下豊彦：SD法によるイメージの測定．その理解と実施の手引き，川島書店，1983.

6，井上正明・小林利宣：評価技法としてのSD法の意義とその用い方（その２）－形容詞対の尺度構成の方法－，指導と評価，31(10)：41－44，1985.

7，大日向雅美：子どもを愛せない最近の母親たち，現代のエスプリ，342：55－62，1996.

8，原田正文：育児不安を超えて，朱鷺書房，1993.

9，岩立志津男・新井明美：母親意識の世代差，静岡大学教育学部研究報告，49：213－222，1999.

10，後藤節美：保育者の葛藤と成長，発達，83(21)：35－40，2000.

Effects of parenting workshop for mothers and nursery school teachers

Rumiko Kimura, Akiko Tsuda, Toko Igarashi
Hitomi Kawata, Hidetoshi Seki

ABSTRACT

This study evaluated effects of parenting workshops for mothers who had a child or children at the age of 0 to 3 and nursery school teachers of the parenting support center. The workshops were held at the parenting support center which was operated by 6 private nursery schools in Kanazawa-city, Ishikawa prefecture. Participants attended three consecutive workshops, and each one took three hours and thirty minutes : 15 mothers and 12 nursery school teachers. The questionnaire was developed for this study based on the semantic differential method for evaluating participants' view toward a child. Within and between participant designs were used for date comparisons : pre- and post-workshop, and between mothers and nursery school teachers. Regarding to the view of a child, the results indicated that during the pre-workshop, mothers showed significant differences on 8 items out of 43 adjective pairs between their feelings toward a child such as liking or disliking. In contrast, they shifted to more positive views toward a child after the workshops although two types of emotions showed significant differences. Both mothers and nursery school teachers responded that parenting would be mainly a mother's responsibility, and they would not change their life style due to adjusting into parenting. Overall, the results suggested that the parenting workshops would be effective especially for mothers to understand their child(ren)'s behavior and needs, and to regain their composure which could be prevent mistreating a child(ren) at home.